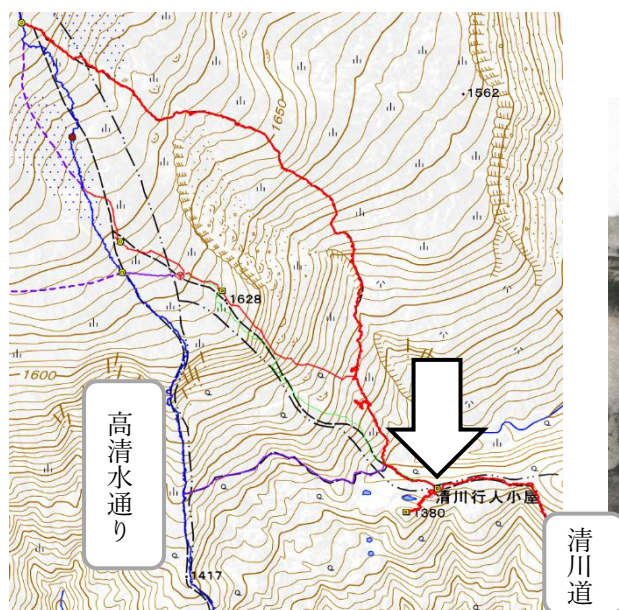


第2巻 第4章 清川行人小屋前石碑群

1. 清川行人小屋

図－1～図－3、同小屋は、本対象エリアにおいて唯一の山小屋（無人避難小屋）である。このエリアに分け入る皆にとって心強い設備が2階建造りの（※）清川行人小屋である。夏でも冷たい水を屋内の炊事場に引き込んでいる、トイレは大小用二つある、薪ストーブ（薪材は小屋内玄関にあり、少なくなれば備付の鋸・鉋で利用者が作る）がある、相応の布団と毛布を用意している。ここを拠点に周遊すれば楽しみ・面白さが深みを増すことになるだろう。なお、晩秋から翌年初夏までは、凍結破裂防止のために水は外に放出させている。（※）無人、利用協力費1千円／人、管理者＝清川仙人会（連絡先；片倉忠幸 090-1067-4225）

清川道基点の岩根沢旧日月寺は、嘉慶元年(1387)に出羽三山の修験者拠点の1つ、本格的な根本道場の寺院として清亮により開山された（山形県歴史・観光・見所サイト）ことからすれば、その頃にはここに小屋（笹小屋と称したのか）を掛けたことだろう。また、昭和30年6月4日、高松宮殿下が岩根沢から登られて夏山スキーを楽しまれたが、その前年昭和29年に同小屋は今の状態に大規模改修（建替え）したとされる。



図－1



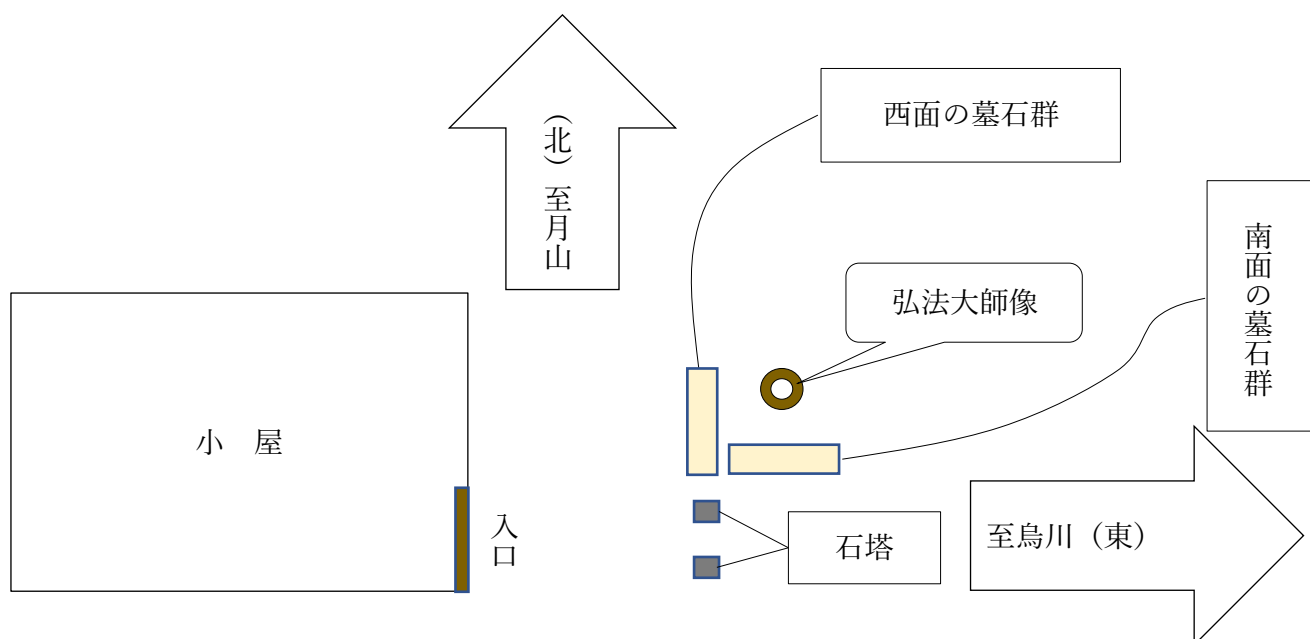
図－2



図－3

同小屋前（標高約1,365m）の外観は図－4のとおりである。

ところで、図－4の姿は明治以降のように見える、梵鐘脚の当りに注目すると、後記の弘法大師像や墓石は一見ないようだが、墓石奉納年代と照合すると、それらは脚元藪の中かもしれない。



図一 4

2. 小屋前 西面の墓石類

後記図(表)－5のとおりである。

3. 小屋前 南面の墓石類

後記図(表)－6のとおりである。



○ 寶性自得清信女 靈位

山先達

佐藤清傳

明治二十五年旧四月□八日(1892)
行年五十四才

(左側面)

○

善榮良慶居士

□□...

春璫壽慶大姉

□□...

引

仙台□鹿

安政四年(1857) □□

鐵岩良心信士 □

□月五日 山先達 長甚坊

○

宮城県伊具郡館山村
小野林吉

碑

小野喜平治

善岳喜宝 (以下欠損)

三昧浄□ (以下欠損)

図(表)－5／西面



○ 嘉永六（以下欠損）（1853）
□照道（以下欠損）
□月九（以下欠損）

二本松上太田村

慶応四_辰年（1868） 佐藤市左工門

羽 受明称念持法清大姉

二月初？日 山先達

玄性坊

明治四_辛年（1871）

圓宝妙鏡信女 位

八月十九日 小野長之助

妻女

（上欠損）清信女

（上欠損）智□居士

（上欠損）□二十四日

□□・

仙台伊具

嘉永四年（1851） 藤田村

○ 智月連照信女

九月十七日 施主

安吉

文久二_戌年（1862）

○ 慈眼明海信女

仙台□□

七月十二日 岩沼南□

□□□儀作

図(表)－6／南面

4. 墓石類集計

前記のとおりに小屋の前に墓石と見られるものが（明らかな供養碑は見られない）10体あり、それらを集計すると図(表)－7のとおり、何と女性戒名のものが7体（70%）を占める、これは何を意味するのだろうか？ なお、10体中8体はその下半分はみな地中に埋もれていた、2体はほぼ全て地中下にあったものを掘り起こしたものである。

―――	全数	女性戒名（法名）
西面	4	2
南面	6	5
計	10	7
図(表)－7		

私は本年2023(R5)月7月31日(月)当該小屋に入ったが、20数年ぶりである、その当時は石碑類にはまったく関心はなかったが、今回は調査の目的があつことから墓石の存在そのものはある程度は予想出来たことである。なぜならば、本道寺口「高清水通り」約10.5km先の元高清水（往古の高清水小屋跡地）に墓石と、その内1体に女性戒名――別記――を発見していたからである。しかし、同小屋前にある数の多さ、はたまた女性戒名の多さには、ただただ驚愕の至りであった。

5. 弘法大師像

図－8aはインターネットサイト「月山・朝日やまだより」→「鳥川經由清川行人小屋への道案内（清川仙人会）」に載っている。図－8bは鹿間廣治著「奪衣婆－山形のうば神」（東北出版企画）」P122-123に載っている写真と説明書きの抜粋である。

両者の共通点は、この像は「姥」であるという点である。

図－8a



■ 16. 姥様像

女人禁制の時代にここまで入り込んだ女性が神仏の怒りをかい石像にされたとされる姥様、満月の夜に家さ帰りてえと泣きうめき声が聞こえると云う。

しかし、私は2023(R5)年7月31日(月)午後、これら―――図－8abと同じものであるはずの次頁図－9の像に初めて対面した時、何の疑いもなく弘法大師像であると一目直感した、同行した一人もそう言われた。にも拘らず、前記関係者はどんな理由を以って「姥・奪衣婆」としたのか、結局は本人は現地に行っていないのではないか？

図—8
b



行人小屋 大蔵村清川（月山）
・・・奪衣婆はここでは「姥地蔵」と呼ばれている・・・
この姥像と他の姥との違いは何と言っても胸のオッパイの形である。まるで、切れ目を入れて押しつぶし丸いアンパンを二つくっつけたみたいだ。・・・

著書添付の概略地図と写真・説明、現地の像と照合すると清川行人小屋前の像である。また、オッパイとかアンパンとか??? 着想の原点は何故に！



これは「弘法大師」像なのだ。（姥ではない）



図—9

象全体の特徴は一目、右手に密教法具の一つ三鈷杵（あるいは五鈷杵）を握っており、その先端部は左胸に当てている、左手に数珠を握っています、世に有る弘法大師像の特徴が顕著である。

図－10aは本道寺「口之宮湯殿山神社（旧本道寺）」に奉納されたもの、図－10bは高野山霊宝館／（公財）高野山文化財保存会HPより拝借したものである。これらに照合して弘法大師像である、「姥・奪衣婆」ではないのだ。



図－10a



図－10b

今度は知人から言われてハタと迷った、顔が子供っぽい、お地蔵似を感じる、首を挿げ替えたのではないかという声である。そこで背面を確認した、背中の丸みを帯びた斜め線は着用法衣の合せ目である、また、首筋は自然な形での接合であり、襟である。一度、破壊されたものに後で繋いだ（接着した）という痕跡はない。作者（石工）の誤りとか未熟とか、様々な見方はあろうが、顔は少年期の空海なのだろうか。果たして、ここ清川行人小屋前の像は本当に「姥様」なのか？ そうだと言うならば明確な根拠を示し私を教導して欲しい。少し残念な処は**何も刻字がない**ことである、第4章に別記した鳥居・石祠と同様に、別の石碑に刻したのだろうか。いずれにしても、机上で印刷物だけを見てあれこれ言っても拉致が開かない、とにもかくも、現地に行って自分の肉眼で見て判定して下さい。清川道・この清川行人小屋は、古来、広く捉えて岩根沢旧日月寺の管理下にあった。同寺は羽黒山との強い結び付きがあったことから、帰依宗派は一時期天台宗であったが、伝教大師像ではなく、なぜ真言宗開祖の空海（弘法大師）の像なのか、と素朴な疑問が湧くが想像は付くことから別記する。ただこの像の設置年は不明なので、関連付けを断定的に論ずるのは言うまでもなく早計というものであろう。

6. 小屋前二つの石塔

その1；図－11aのとおり二つの石塔について記述する。2023(R5)年9月23日（土）～9月24日（日）、宮林良幸と大沼香は刻字調査を行い、**向かって左側石塔の刻字は次頁図－12**のとおりである。



図－11a



図－11b



図－11c

今の現地（西を背に小屋玄関側から東側を見た）

お札

お札版木

東を背に小屋玄関（西）側を見た

視線の方角が反対なので留意する。

中央頭部に胎藏界大日如来の梵字が頭に刻されている。

図－12b石塔（墓石）の**左側に台座だけ**が見えるが、ここに何か石碑があったのではないかという疑問がある、台座の中央部に丸い穴（四角か）が有り、上物の倒壊防止策のためだったのではない？ 図－11bのお札右下を凝視すると2基となっている。同図11cは、その昔、道小屋の管理人、烏川不動滝（不動尊）の専属別当を担っていた岩根沢古澤家に伝わる同社お札の版木であるが、同図11bの版木であろうから右下にも2基が描かれている。しかし、今は1基だけであり、どこか行ったのか？



図－12a/左面

文化十三年(1816)
正月廿二日



高さ84cm×幅34cm×奥行26.5cm

図－12b/正面

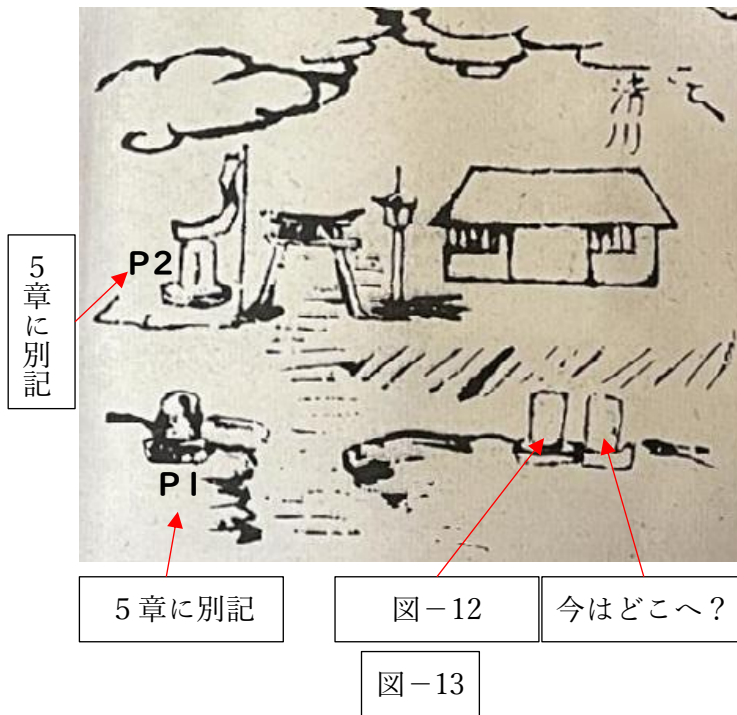
實聞浄堯信士



図－12c/右面

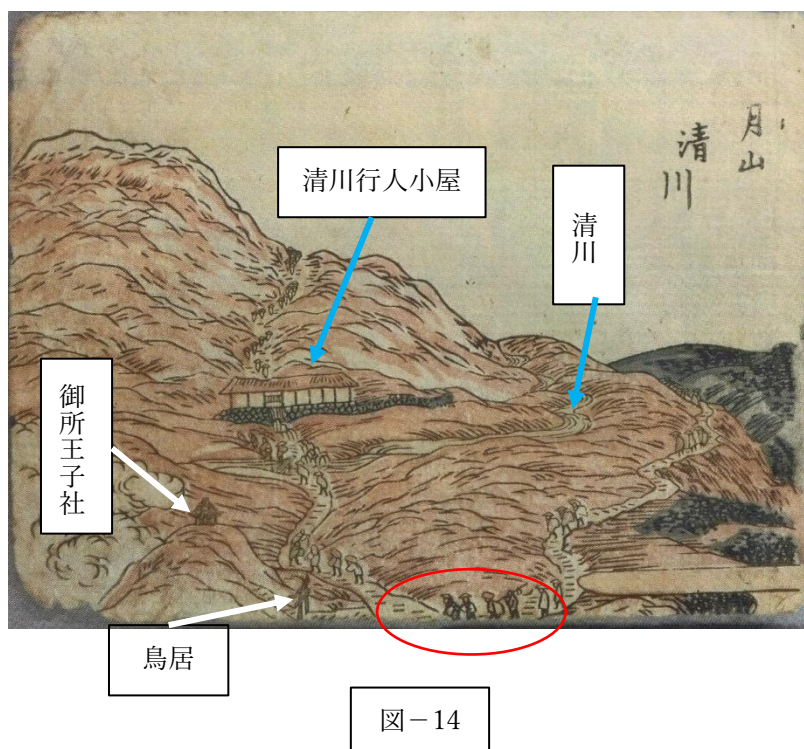
仙臺名取郡中田町
佐藤義右エ門

その2；図(表)－11bお札下部を拡大したのが図－13である、P 1 石塔については「第4章『清川御所王子 社』」に記述する。



7. 義川の描いた小屋の位置

まずは前提として、義川の出羽三山（湯殿山）参詣路に沿った 20 数枚の版面絵に関し、西川町史上巻 1017 頁に「・・・それぞれは写実的な風景画であり、『諸国道中金の草鞋』と違って、実際に現地を訪れて写生した作品となっている。・・・」とある。図-14 における位置関係を見ると、清川行人小屋は清川より上流側に、また、御所王子社よりも北方に描かれている。しか、現在の小屋の位置はこの絵図の下段、赤色実線で囲んだあたりということになる。 義川の版面絵は文政三（1820）年作成であるが、その当時はこの絵図のと通りの位置だったのか、それとも、義川は聞き捨ての想像で描いたのだろうか。「実際に現地を訪れ（た）・・・」は何を根拠に解説したのだろうか。



8. 刻字のある台座

2024(R6)年11月14日（木）午前、大沼は同清川行人小屋前の土中から面白い石碑を発見し、掘り起こして片倉忠幸と共に同行調査を行った。

同小屋前石碑群図－14a中白枠内を拡大したのが同図b、同図中の青色枠内は雑木と笹竹の藪であった。ほとんどが土中に埋まっていた図－15のとおり直方体の台座を掘り起こした。よく見ると、この直方体の下にはこれを載せる基礎的平板の石造台が埋まっている。この時はここで終わっていた。



図－14a



図－14b



図－15a



図－15b

翌年2025(R7)年7月20日（日）高橋昌一と共に、刻字等の再調査を行った。

大きさは、長約48.7cm×短約32.4 cm×厚さ13.7 cm／穴 長約15.0cm×短約7.0 cm×深約4.5 cmである。

図－16のとおり、一面には「神心講」の文字と、隣りには絵柄が彫刻されている。**仙台市土橋通の講中**49名の名前が刻まれている。ただ残念なのは、設置の年号が刻されていないことである。彫り物の絵柄について最初は皆目見当が付かなかった。AIの日本語チャットGPTとグーグルAI－Geminiへの問合せに対しては、中央のものは船や巴紋^{ともえもん}、右端のものは石灯籠や玉串等の回答であったが腑に落ちないでいた。

正面  神心講 皿二つ (神饌器) 水差し (水入器)	一面  仙台市土橋通 志願人 門脇勝次郎 柴山徳治 寄進者 10 名
二面  寄進者 24 名	三面区  寄進者 13 名

図-16

なお、ネットを参考に、『神心講』とは、日本の伝統宗教である神道祭祀を重んじ、「神の心（神心）」に従い、道徳的生活を涵養する信仰団体の講中という意味合いであろう。なお、広島県福山市沼隈町能登原白浜に「石鎚神社 神心講千年遙拝所」があるという。

その後、岩根沢三山神社の祭務（神職）岩本功さんの意見を貰った。第一声（直感）は、神様に対する神事（祭儀）を行ったことの記念碑的のシンボルではないかということであった。以上を整理すると、日本神道の神様にお供えする際の基本的な供物3点は「米（お米）と水（お水）と塩（お塩）」で、これらは「日供（^{にちぐ}にちぐ）」という。米の発展形が海の幸、山の幸となり、水の発展形はお酒となる。なお、図-17は2025(R7)年6月8日（日）に開催した私の中学校同期の古希祝の神事である。

すると、その中央絵柄は神饌を盛った皿二つ（二つの皿）、右端図柄は水瓶であろうと推察する。 **それでは神事の対象は何だったのか？**



図-17

9. 刻字のある銅板

また、この台座脇の地中に図-17のと通りの銅板（縦 10.7cm×横 33.1cm×厚さ 0.5cm）が埋まっていた。^{たがね}鑿を当てて刻したその文字を活字化した内容は同図のとおりである。これは**何かを奉納した**趣意を刻字したもののだろうが、それは何なのか？そして、ここで**重要な一つのポイント**は「**岩根澤社守 古澤栄二郎**」の名前である、別記したとおりに岩根澤の古澤氏は、「清川坊」と称し、鳥川不動尊（不動滝）の別当、御所王子社の社守、鳥川行人小屋・清川行人小屋の管理人を担っていたいわば清川別当の身分であった。

ここで注目すべきは、古澤家に伝わる清川別当時代を証拠付ける遺品について別途報告しているが、それはあくまでも里（麓）に遺る品々である、しかし、本件においては、現場（現地）にその身分の証拠付けが表れたということである。清川坊が現場において、何かの寄進事業を直接指揮していたということだろう。これに刻されている世話人は、そんなに遠いとは思えない大郷村住民である。**それでは、奉納したとされる対象物は何だったのか？**



人 話 世

奉納	昭和十年三月吉日	西村山郡岩根澤	社守 古澤栄二郎
東村山郡大郷村船町	秋葉五助	菊池鶴治	鈴木惣五郎
東村山郡大郷村中野	鈴木富治	伊藤寿代?	原田五郎
櫻井平七			

朱字化、下線引きはき大沼が細工したもの

図-17

10. 神事と奉納との関係は如何に？

（1）私はこの台座を見た時に次の3点が浮かんだ。

一つ目は、同小屋前の石碑群において、図-18aを拡大したのは同図bであるが、左側のこれは何かの台座に見えるが？である。これも前記同様に基礎的平板の石造台に乗っており、形状はほぼ正方形で中央部には正方形の繰り抜いた穴がある。大きさは18b台座43.0cm×42.0 cm×14.0 cm、台座の穴9.5 cm×9.5 cm×深14cm、基礎平板63.0cm×58.5 cm×14.0 cmである。



図-18a



図-18b

A (図-18 台座再掲)

地中に埋めた基礎的平板台の上に台座を乗せた状態は共通する

台座の平面と、中央穴の形はほぼ正方形

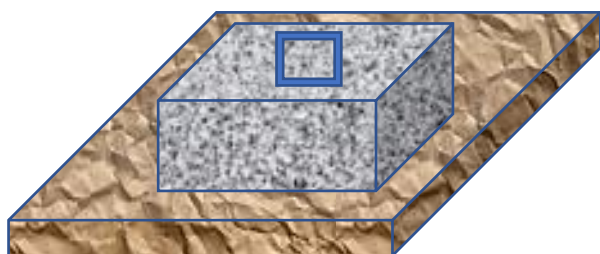


図-19a

B (図-15 台座再掲)

台座の平面と、中央穴の形はほぼ長方形

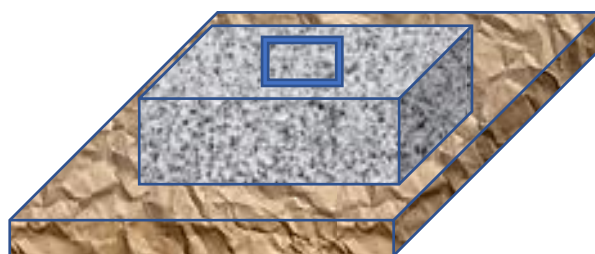


図-19b

この二つの台座の形状特徴からは、対の組合せなのではないかと直観した。

対の組合せということからは、

二つ目としては、清川別当古澤家に残る版木で擦った図-19「五所皇子稲荷神社 (=御所王子社)」のお札 (神札) に描かれている鳥居の基礎台座との関連有無である。あるいは、向かって右側に鐘を吊るした竿、左側にのぼり旗の竿が建てられており、この基礎との関連が有りや無しやである。

例えば、自然不朽か、あるいは理由があって廃却したとしても、その台座をわざわざ小屋の前まで移動し、それも、ちぐはぐな位置に置くだろうか? という疑問が残る。なお、鳥居があっただろうと思われる場所には残骸を見付けるに至っていない。

三つ目としては原田一男著「月山登山案内」に掲載の図-20中の梵鐘脚の基礎との関連が有りや無しやである。配置の東西開きとしては類似しているが、今、図-18 台座の置かれている位置は、写真に向かって左脚 (基礎) からはより西にずれているので、ぴったり一致しないように見えるという疑問が残る。なお、梵鐘は戦時中に引き上げられた (抛出された) と伝わっているものである。



図-19



図-20

(2) 現況配置を踏まえた正方形と長方形の意味合いは如何に？
 戻って、前記のと通りの対の関係性で捉えている台座を図-21のと通りに並べて見た。

A；相対的にBより西側

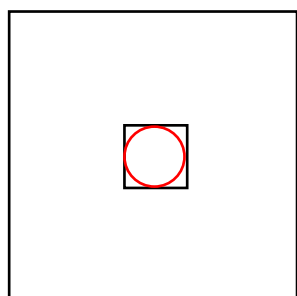


図-21a

B；相対的にAより東側

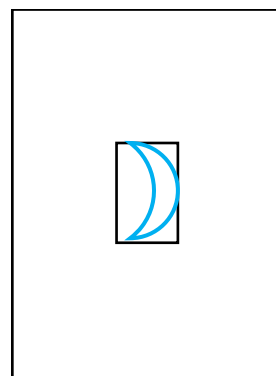


図-21b

正方形にきれいに内接する図形は円である。長方形にきれいに内接する図形は月の象徴たる三日月である。ここに、台座の中央部切込みは日月、すなわち、湯殿山と月山に対応させた。つまり、仮に梵鐘に立ち御山に視線をやれば、左手方角は湯殿山に、右手方角は月山に対応することになる。これは、図-22のとおり「御所王子社（＝五所皇子稻荷神社）」石祠の日月彫り物と信仰上の共通性を感じる。御所王子社の石祠に刻んだ日と月との関係と同等の思想であろう。

もう一つの仮説は、やはり、前記鳥居に係る基礎台座であったのではないか、鳥居の右手にBの長方形、左手にAの正方形の物を配置したとすれば上記同様の見方に通じる。



図-22

(3) 総合考察

本件A・B二つの台座には設置（建立）年が刻されていないが、B台座と一緒に埋められていた銅板には「奉納」と年号が明瞭に刻まれていること、そして、台座の氏名は現代的な字体であり、明らかに明治以降のものであることを踏まえる。

結論的には、本件台座と銅板は一体のものであり、図-19記載の清川小屋脇、清川御所王子神社入り口鳥居の建立、または、梵鐘設置に係る寄進事業の証であろう。仙台市土橋通の門脇勝次郎・柴山徳治の二人が志願人、つまり、発願人（願主）となり、施主47名と共に、計49名が鳥居（含む付属飾り物）を寄進した、その現場への建立と開眼供養・入魂儀式を託された岩根澤の社守古澤栄二郎が祭主となり、世話人と共に神事を厳修したのであらうと推察している。

ただ、刻字の3月は間違いなことからは、本当に現地で行ったのか？ 3月ということに拘り（訳）があって齋行せざるを得なく、麓の岩根沢で行ったのだろうか。

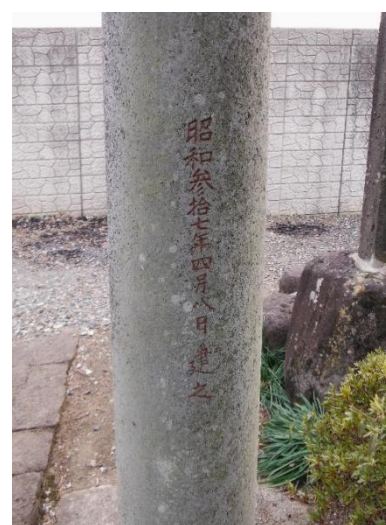


図-23

あるいは、本件台座と銅板は、一体では無く別異である可能性もある。例えば、本件B台座は鳥居と一対であるとすれば、建立年は鳥居の脚に刻むこと（図-23参照）は普通に有り得る。この場合は、銅板は梵鐘対応となろうか。しかし、梵鐘の場合は、ほとんどは、設置奉納の趣意は鐘本体に刻字することからは、脚基礎に刻字したとは思えない。

果たして、鳥居の大きさ（高さ）は数メートルもあったのだろうか、柱の材質は何だったのだろうか。もしも石材であれば、昭和十年以降の残骸はあってしかるべきであるが、周囲・周辺には見当らない。もしかすると、柱は木材であったのかもしれない、ならば、風化・破損して土に還ったことだろう。石材の本件台座どこから調達したのか（産出地はどこか）？ 石工は？ どのような手段で運搬したのか？ 梵鐘の基礎であったとしても同様の疑問が湧く。**真相・真実を知りたい！**

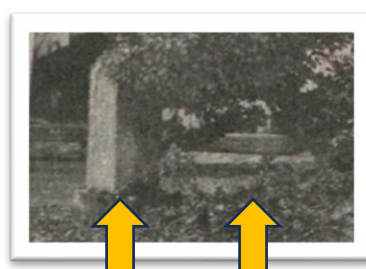


図-24

ところで、図-20の小屋入口前を拡大すると図-24のとおりで、左側の石碑は前記図-12だろうが、右側は何であったか？

11. 「童子墓石」を土中から発見

全体が前記の台座傍の地中下にあった図-25のとおり像を発見・掘り起こした。石像はおかつぱ髪型の女の子を模したもので、像容は「おかつぱ地蔵」というのか。刻字解読において不明な処は、2025(R7)年7月22日（火）山形市内在住市村幸夫さんの協力を賜り、同図のとおりである。なお、事務局の責任において活字化している。

明治十歳
金翠軒全心良照居士
六月廿二日 □密□ 後藤儀左衛門



明治十二年
九月九日 禪明童子
回向同人 絲

高さ 36.2cm × 幅 25.2 cm × 奥行 9.5 cm

図-25

この碑文の意味合いを次のように解釈する。明治十二（1879）年九月九日に子供が死去したことにおいて、遺族は、その2年前の明治十年六月に父親が死去していたことを回想し、一緒に供養することとし、二人の故人と縁のあった人々が心をつにして、故人の安らかな成仏を願い、その繋がりを未来へと繋いでいくという、深い供養の気持ちを表現するために、生前、出羽三山、とりわけ、月山と湯殿山の熱心な信仰者であったことを尊重し、この地に足を運んだことを踏まえて、この場所に墓石を安置したものと解釈できる。なお、奉納者の居住地の刻字は見当らないのは残念である。

なお、童子の戒名墓石は「来名戸神」後にも安置されていることを突き止めている。「来名戸神」の童子墓石は一般的な直方体の石であるが、これはこのとおりに子供のおかつぱ姿を像にしている、両手で薬壺^{やっこ}を握っているようにも見える、薬師如来、あるいは地蔵菩薩を重ねているのだろうか。江戸期は数え歳7歳になるまでは人間とは見なされなかった時代なので、よって童女とは7歳以上15歳未満なのかもしれない。

12. 関連その他／図-26

対比的に面白いことに気付いた。天台宗帰依領域「清川道」沿いに鳥居または梵鐘の寄進事業に係った世話人は大郷村（中野・船町）と、真言宗帰依領域「高清水通り」沿いに丁石を寄進した達磨寺村は、最上川支流の須川を挟んで隣接する集落である。小さな川一本を挟んでの隣同志であったが、宗教心はすれ違いであったということなのか。両者を分ける小さな川は高い高い逆壁として立ちはだかっていたのである。

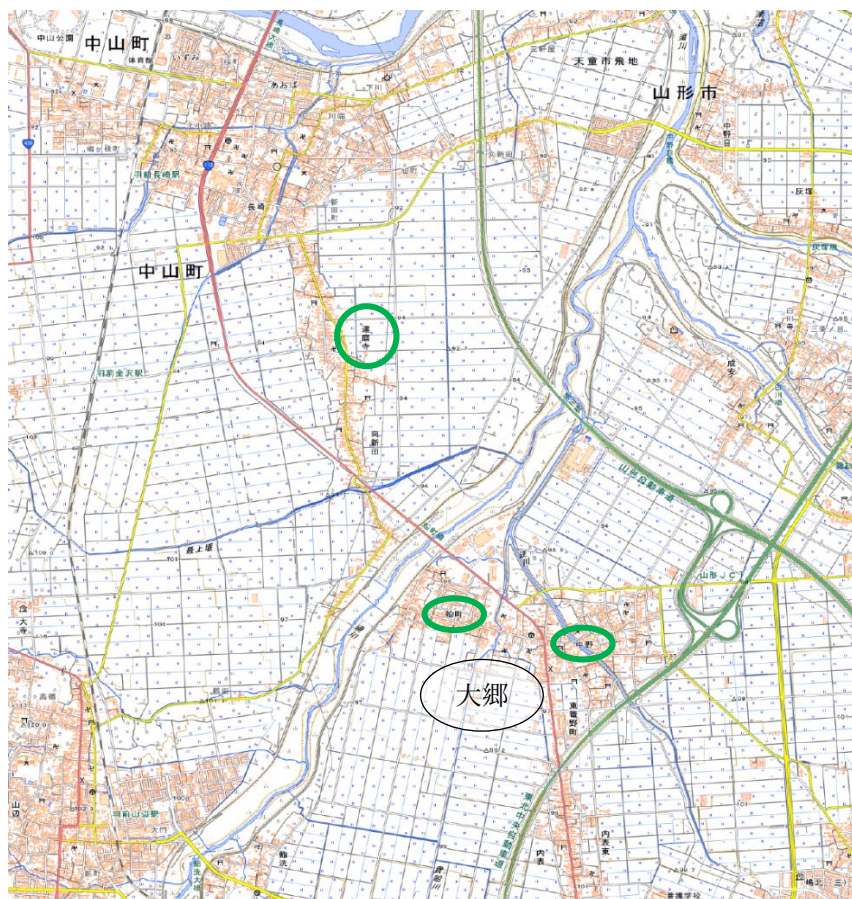


図-26

(end)